

1 除染分科会

(1) 河川水中の放射性セシウムに係るモニタリング

- 2011年以降、河川水中の放射性セシウム濃度が継続的に減少している。
- 溶存態及び懸濁態の放射性セシウムの実効半減期は、チヨルノーベリ原発事故等で観測されている国際的な知見とおおむね一致している。
- 河川水中に少量の放射性セシウム粒子(CsMPs)が存在するが、河川水中の放射性セシウムのごく一部を占めるに過ぎない。CsMPsの淡水への溶解度は低く分解も遅いため、環境への影響は小さいと考えられる。
- 河川試料からCsMPsの有無を判定する簡易な方法を開発した。

(2) 計算コードを用いた河川水中の放射性セシウム動態の計算

- 米国で開発され海外(チヨルノーベリ含む)でも適用されている計算モデル(TODAM)を用いて、洪水時等を含む放射性セシウムの動態を計算し、実測値と良く一致した結果を得た。

2 廃棄物分科会

(1) 放射性物質を含む埋立処分場における放射性セシウムの動態

- 県内の複数の処分場における浸出水中の放射性セシウム濃度のモニタリングを継続した。
- その濃度や変化の違いを、それぞれの処分場に埋め立てた廃棄物等の違いとあわせて検討し、さらに、一般的な土壌を用いた最終覆土による放射性セシウムの浸出低減効果について検討した。

(2) 計算コードを用いた安全性評価

- IAEAが開発した計算コード(ECOLEGO)を用いて、2つの処分場の安全性評価を実施した途中経過について議論した。
- その結果、今後実施すべき課題について整理した。

3 モニタリング分科会

(1) 森林における空間線量率及び立木の放射性セシウム濃度のモニタリング

- 森林における空間線量率は徐々に減少し、県内の多くの地域で、 $0.23 \mu\text{Sv/h}$ を下回る空間線量率を示している。
- 落葉層と立木の放射性セシウム濃度との関係、調査方法について検討した(きのこ原木に用いられるコナラ含む)。
- これまでのデータから、今後のモニタリングの必要性や仕様(地点数、頻度、期間等)、避難指示が解除された区域での調査の実施について検討した。

(2) 里山再生事業による森林整備等の取組み及び成果

- 森林のうち居住地域に近く人々が利用する「里山」において行われている里山再生事業(除染、森林整備、空間線量率等測定等)の成果が確認された。

4 今後の計画

(1) サマリーレポート

- 当プロジェクトを開始した2013年以降の成果等を取りまとめた報告書である「サマリーレポート」を2023年春に完成予定。IAEA及び県のウェブサイトにもいずれも日本語及び英語で公開し、国内外に広く情報発信を行う。

(2) サマリーワークショップ

- 上記(1)同様の目的で、2023年2月に福島県内にてIAEA、県、中央省庁、県内市町村、研究機関に対し上記の2013年以降の成果等を報告する会議「サマリーワークショップ」を開催予定。